

## シネマ日記



No. 68

○月×日 「掌中の珠」という言葉がある。杜甫の詩の一節からとられたもので、最愛の子供の例えだ。だが多くの親にとって、珠への思いとは別に、希望が裏切られるのが普通だ。評論家の沢木耕太郎は言う。

「子供は親を選べないが、選べないのは親も同じかもしない。」「少年は残酷な弓を射る」(リン・ラムジー監督)の子供は赤子のときから、母親に全く懐かない。母親はかつて世界を旅して自由奔放に生きてきた。だが、結婚、妊娠……。束縛されてしまうことへの違和感を心の奥に宿しながらも、出産、子育てへ進んでいく。誰でも多少は感じることだが、子供のほうが母親

の自分に対する微妙な心の壁を鋭敏に感じ取ってしまったら……。少年は母親を様々なに困らせながら、悪意をもって成長していく。親子なのだからいずれわかり合えるなどというのは幻想だ。日本社会でも親の子への虐待、逆に子の親への暴力は日常茶飯事。この映画でも、少年は16歳になったとき大事件を引き起こす。映画は解決策を与えてくれるわけではないが、残酷なほどの憎しみも愛の裏返しという、人間の深層心理の厄介さが語られる。少年の悪意は母親の視点から一方的に描かれているが、その視線には女性監督ならではのものがあがる。母親役のティルダ・スウィントンの不安定に揺れ動く感情表現がすばらしい。

○月×日 ビルマ(ミャンマー)の非暴力民主化運動の指導者、アウンサンスーチーは2010年11月に3度、15年に及んだ自宅軟禁を解かれ、今年4月の国会議員補欠選挙で国会議員に復帰、6月には24年ぶりに外遊を実現、ノルウェーのオスロで21年前に授与さ

れたノーベル平和賞の授賞式にも臨んだ。形式的にせよ民政を実施した軍事政権を評価して、日本はじめ欧

米・近隣諸国が経済援助に踏み切っているのが現状だ。「The Lady 引き裂かれた愛」(リュック・ベッソン監督)は、そのアウンサンスーチーの半生を描く。映画

は07年の仏教僧侶の抗議デモが流血の惨事と化した事件までで終わっている。昨年に完成を見た映画なので、その後の動きには触れていない。ただ今後も、これまで繰り返された民主化弾圧の歴史を見れば、楽観はできない。もちろん揺り戻しを許してはいけないにしても、である。その意味では非暴力の象徴である僧たちの抗議デモをラストシーンにしたのは印象的だ。入国を拒否されたイギリス人の夫とスーチーとの引き裂かれた悲劇の愛に物語の多くが割かれ、軍による民衆への圧制の実態や民主化を拒んできた背景などへの踏み込み不足に不満は残るが、種々の制作上の制約もあったのだろう。スーチー役のミシェル・ヨーが芯の強い

信念の女性像を好演している。

○月×日 若い母親に抱かれたつぶらな瞳のあどけない赤ちゃん、幸せいっぱいの母子の姿など、優しい淡い色使いの水彩画の絵本は誰もが二度三度は手にしたことがあるはず。「いわさき ちひろ」27歳の旅立ち(海南友子監督)は生涯をたどったドキュメンタリー。絵本からは、「幸せっていいなあ」というメッセージが強く伝わってくるが、その絵の背後には、自らの太平洋戦争下の戦争体験から生まれた平和への強い願い、反戦の思想があった。絵本「戦火のなかの子どもたち」(73年)に描かれた若い母親の平和を願う強いまなざしに、今も思いが色褪せず伝わってくる。

○月×日 東北の大震災・原発災害以降、宮沢賢治の詩や童話が見直されている。科学する心や自己犠牲の姿勢に共感を覚えるからだろう。アニメ「グスコブドリの伝記」(杉井ギサブロー監督)のファンタジックな物語は衣服の清涼剤である。(内藤 哲)